

④ 実用新案公報 (Y2)

昭64-2737

④ Int. Cl.⁴

A 61 H 23/00

識別記号

3 2 0

庁内整理番号

7720-4C

④ 公告 昭和64年(1989)1月24日

(全4頁)

④ 考案の名称 治療用浴そう

④ 実 願 昭56-22584

④ 公 開 昭57-136334

④ 出 願 昭56(1981)2月19日

④ 昭57(1982)8月25日

④ 考 案 者 大 沢 栗 梓家川原横浜市金沢区六浦942-15

④ 出 願 人 東洋医療株式会社 東京都品川区上大崎2-12-7

④ 代 理 人 弁理士 嶋 宣之

審 査 官 乾 雅 浩

④ 参 考 文 献 特開 昭55-118752 (JP, A) 特開 昭55-78962 (JP, A)

実開 昭53-157590 (JP, U) 実公 昭52-55357 (JP, Y2)

実公 昭52-55917 (JP, Y2)

1

2

④ 実用新案登録請求の範囲

(1) 背もたれ壁に上半身をもたれかけた状態で脚を十分に伸ばせる大きさを保持した浴そう本体と、この浴そう本体所要箇所に設けた、気泡を噴出させる気泡噴出口および温水を噴出させる温水噴出口とを備えた治療用浴そうにおいて、前記浴そう本体の両側壁の内側であつて、温水を満たした際に水面下となる位置に、その長手方向に沿つて支持棒を架設するとともに、この支持棒にハンドグリップを摺動可能に設けたことを特徴とする治療用浴そう。

(2) 前記ハンドグリップの摺動抵抗を可変にしたことを特徴とする前記請求の範囲第1項記載の治療用浴そう。

考案の詳細な説明

この考案は水圧や気泡(超音波)を入浴患者に作用させるとともに、患者自らも浴そう内でリハビリ運動ができるようにした治療用浴そうに関する。

以下にはこれを図示の実施例について説明する。

浴そう本体1は、その背もたれ壁2を、後ろに傾斜させるとともに、その背もたれ壁2に上半身をもたれかけた状態で脚を十分に伸ばせる大きさにしている。換言すれば入浴患者が最も安楽な姿勢で入浴できるようにしている。

そして上記背もたれ壁2には、枕3を設けるとともに、この枕3のまわりを他の部分より高い囲壁4でかこつている。

上記囲壁4があることによつて、入浴患者の顔のまわりが外縁から隔離され、精神的にもきわめて安楽な状態になる。

上記のようにした浴そう本体1には、温水を噴出させる温水噴出口及び気泡を噴出させる気泡噴出口を設けるが、それらの位置関係は次のとおりである。

すなわち、前記背もたれ壁2には、片側3つで合計6つの温水噴出口5~7を設けている。これらのうち温水噴出口5は入浴患者の両肩に対応し、温水噴出口6は肩の後面に対応し、また温水噴出口7は腰部に対応させるとともに、それら各温水噴出口とも脊椎の両側に位置させている。

また底面8に設けた温水噴出口9は2列にするるとともに、それら片側の噴出口がそれぞれ入浴患者のやや開いた脚に対応するようにしている。

一方浴そう本体1の両側壁10、11には、気泡噴出口12、13を設けているが、この気泡噴出口12、13は、背もたれ壁2にもたれかかった入浴患者の上半身に向つて気泡が噴出される関係にしている。

また前記背もたれ壁2に対向する足側の後壁14にも、1対の気泡噴出口15を設けているが、

この気泡噴出口15は、入浴患者の足裏に向けて気泡を噴出させる関係にしている。

しかし上記した温水噴出口及び気泡噴出口を全体的にとられると、入浴患者の全身に水圧あるいは気泡（超音波）が作用する関係にある。つまり入浴それ自体の治療効果と、水圧あるいは超音波による効果とが相乗的に作用し、きわめて効果的な治療を可能にする。

また前記図壁4には、電気制御装置を組込み、その操作パネル18を操作して、いつどの噴出口から温水の噴出による水圧あるいは気泡を噴出させるか等の治療システムを選択し、入浴患者の症状等にあわせて治療ができるようにしている。

さらに前記図壁4の内側には、スピーカー17とマイク18とを設けている。このスピーカー17とマイク18とは、入浴患者と医者とは常に会話できるようにし、患者に安心感を与え、とも、医者が前記のように治療システムを設定した後、患者につきそっていなくてもよいようにするためである。

一方上記スピーカー17は、単に患者と入浴患者との会話のためだけでなく、患者を精神的にもリラクセスさせるために音楽などを流す機能も果たす。なおこのスピーカーを図壁4両側に一つずつ設ければ、ステレオとしても機能する。

上記のようにスピーカー17から音楽を流すということは、浴そう本体1等の構造と相まって、きわめて効果的な治療ができることになる。

すなわち入浴患者は、背もたれ壁2にもたれかかって頭を枕3に乗せ、しかも脚を十分に伸ばした姿勢になれるので、それだけでリラクセスする。その上周囲が図壁4にかこまれているので、あたかも個室でのんびりしているのと同じ気持ちになる。そこに音楽が流れてくれば、たとえ健康なものにとつても精神的緊張などいつべんになくなってしまふ。

このように精神的な緊張をなくし、ゆつたりとした気持ちにさせて水圧あるいは超音波治療をできるので、患者に水圧や超音波を単純に作用させるのとは異なり、その治療効果は計り知れないものになる。

一方前記後壁14側には、腰掛け板19を設けるとともに、その周囲に手摺り20を設けている。この腰掛け板19は、そこに腰かけた患者が

脚だけを浴そう本体1内に入れ、後壁14に設けた気泡噴出口15からの気泡をその脚に作用させるいわゆる部分浴用のためのものである。

なお図中符号21はクッションで、腰掛け板19に腰かけた患者の背もたれ用である。

前記した浴そう本体1には、さらにリハビリテーション用としての手摺り装置aを設けている。

この手摺り装置aは、第2及び4図からも明らかとなり、浴そう本体1の両側壁10、11それぞれに、その長手方向に沿って支持棒22を架設するとともに、この支持棒22にハンドグリップ23を摺動自在に設けている。

すなわちこのハンドグリップ23は、そのグリップ本体24内に摺動材25を備え、この摺動材25と支持棒22との摺動抵抗をハンドル26によつて調整しうる構成にしている。そして上記摺動材25にはマグネット27を内装する一方、支持棒22の一端にリレースイッチ28を備えている。これらマグネット27及びリレースイッチ28によつてハンドグリップ23の往復動回数を、すなわち手摺り回数を電氣的にカウンターし、それを前記図壁4内側に設けた表示盤29に表示しうる構成にしている。

しかしリハビリ運動を上記手摺り装置aですると、浴そう本体1内の水の抵抗により、その運動効果が上がるとともに、その運動後は前記した水圧あるいは超音波治療を施すことができ、きわめて効果的である。

なお図中符号30はオーバーフロー排出口、31は温度センサーである。

以上のように、この考案は、浴そう本体の両側壁の内側であつて、温水を満たした際に水面下となる位置に、その長手方向に沿って支持棒を架設するとともに、その支持棒にハンドグリップを摺動可能に設けたものであるから、ハンドグリップを握つて手摺り運動をすれば、浴そうにおける治療と並行してリハビリをすることができる。

またハンドグリップが水面下に位置しているので、ハンドグリップの摺動速度を変えるだけで、ハンドグリップの受ける水の抵抗が変る。これにより患者は摺動速度を変えるだけでその都度自分にあつた運動をすることができる。

図面の簡単な説明

図面はこの考案の1実施例を示すもので、第1

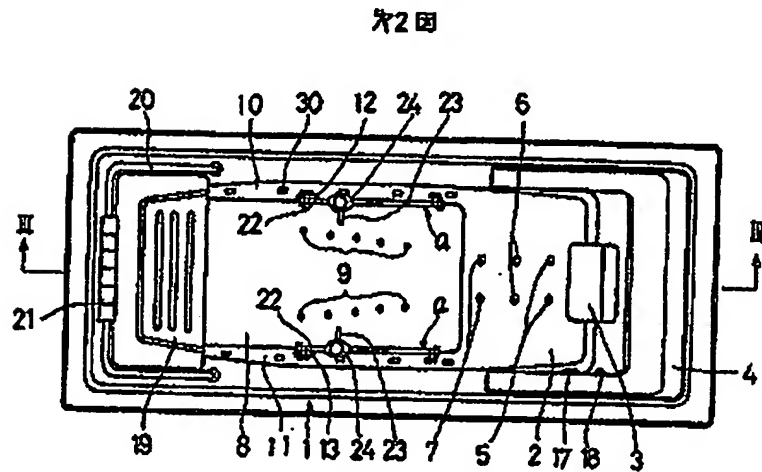
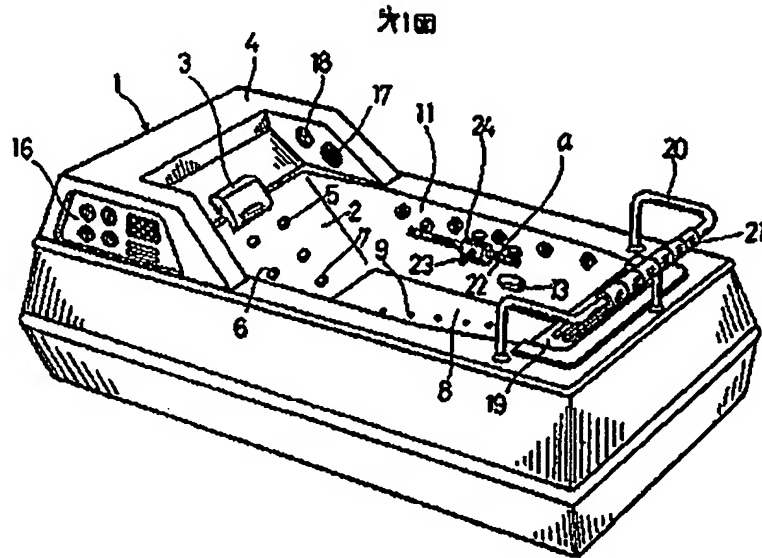
5

6

図は斜視図、第2図は平面図、第3図は第2図Ⅲ-Ⅲ線断面図、第4図は手摺り装置の拡大一部断面図である。

1……浴そう本体、2……背もたれ壁、5～

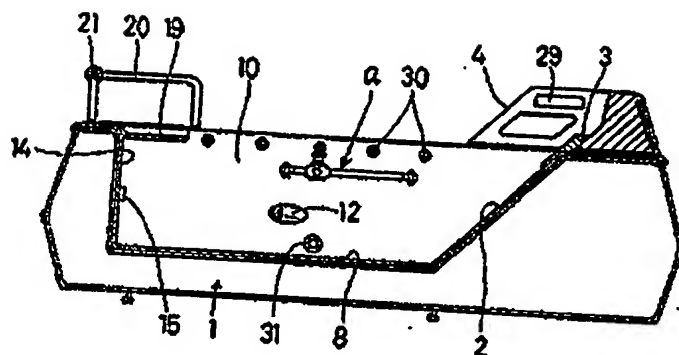
7, 9……温水噴出口、10, 11……側壁、12, 13, 15……気泡噴出口、a……手摺り装置図。



(4)

実公 昭 64-2737

第3図



第4図

